

東北地方太平洋沖地震に寄せて

日本マレーシア学会会長 宮崎恒二

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は未曾有の大災害をもたらしました。震災ならびに津波で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。また、被災された方々や被災地の皆さまには、心からお見舞い申し上げます。災害や避難所の状況に関する映像を目にするだけで心が痛みます。しかし、現地の方々の苦悩と悲しみはいかばかりかと思いを巡らさずにはられません。

マレーシアにも被害を及ぼした2004年12月26日のスマトラ沖地震と津波の折りには、膨大な数の犠牲者を生み出した津波の恐ろしさに打ちのめされましたが、同時に日本マレーシア学会の会員も積極的に関与したように、その復興支援活動の国際的な広がりにも大きな感銘を受けました。それから十年を経ずして同じようなことが日本でも起きようとは思っても見ませんでした。今回の災害に際しても、救助隊が各国から派遣され、救援物資や経済的な支援が海外から寄せられ、また、世界各地からのお見舞いのメールが個人に送られてくるなど、世界がつながり、相互に助け合うことのできる時代に生きているのだという思いを強くします。

会員の皆様におかれましても、この惨事を力強く乗り越え、またその経験を世界に伝え、生かしていく役割を担っていただきたいと願う次第です。

「ブーム」社会の行く末

多和田裕司(大阪市立大学)

春の訪れとともにまたいつものようにプロ野球のシーズンが始まろうとしている。根っからのタイガースファンとしてはチームの仕上がり具合が気になって、仕事が溜まっているにもかかわらず、ついついスポーツニュースに見入ってしまうのだが、悲しいかな今年はタイガースの情報が流れる度合いがかなり少ないように感じられる。原因は「佑ちゃん」である。どのチャンネルでも早稲田大学から北海道日本ハムファイターズに入団した一年生投手の動向がまず報じられる。「佑ちゃん入寮」「佑ちゃん北海道上陸」・・・そしてそれを追っかけるオバサマたち。野球よりも「佑ちゃん」がニュースなのである。プロ野球はいま「佑ちゃんブーム」なのだ。

考えてみれば、日本ではずっとなにかの「ブーム」が続いている。日本中がスプーンを握りしめた超能力ブーム、たけしや紳助がテレビで毎日しゃべりまくっていた漫才ブーム、最近の韓流や多摩川に流れ着いたアザラシまで、ありとあらゆるところにブームなるものが沸き起こる。おそらくコンパでの一気飲みや街で目にする行列なども、みんなで同じ行為・行動をとるという意味においてはブームと通底するものであろう。

翻ってマレーシアにはブームがない。マレーシアに関心を持つようになって30年近くになるが、いまだに「これがいまブームだ」というものに出会った記憶がない。安易な比較文化論は慎まなければならない